



Sous les Toits de Paris

1959. 10~11

上映映画解説

No. 61

巴里の屋根の下

Sous les Toits de Paris

仏トビス映画1930年作

原作・脚本・監督…………ルネ・クレエル
撮影……………ジョルジュ・ペリナル
作曲……………アルマン・ベルナル
歌……………ラウル・モレッティ
助監督……………ジョルジュ・ラコンブ、マルセル・カルネ、ウッサン、ドゥ・ジャック

—キャスト—

アルベエル……………アルベエル・プレジャン
ポーラ……………ポーラ・イルリイ
ルイ……………エドモン・グレヴィル
フレッド……………ガストン・モドオ
老人……………ポール・オリヴィエ

1931年5月31日大勝館・新宿松竹座で封切

『巴里の屋根の下』について

飯島 正

日本でルネ・クレエルを知ったのは『巴里の屋根の下』以来である。それより以前（すなわち無声映画時代）にもクレエルはフランスですでに有名であった。しかし彼が国際的な名声をえたのは、まず『巴里の屋根の下』からであるといえるだろう。それほどこれは、クレエル自身にとっての記念的作品である以上に、トオキイ初期の名作として価値があった。

1930年といえば、1928年以来のアメリカはともかくとして、大体西洋諸国では、興行のトオキイをどうするかに頭をなやましていた時代であった。そして、一般的には、あたらしく獲得した音声の要素を、ただもううれしがって濫用していたのである。舞台劇またはレヴィウ場面の実写のようなトオキイ作品が横行していた。これに反逆をくわだてたのが、アメリカのルベン・ママウリヤン、ジョゼフ・フォン・スタアンバ

アグ、ソヴェトのニコライ・エック、そしてわがルネ・クレエルであった。

現在この『巴里の屋根の下』を見ると、非常にアツケなく、ものたりなくおもわれる点があることとおもう。これは古典的映画を見るときには、いつも注意しなければならない点であるが、いまから20年30年とたった映画は、なんとしてもいろんな意味で古い。特に技術的には、いたらない点が多々あるのである。だからそういう点にばかり注意して見ることは、意味がないといっているのである。また風俗的に、どうしても時代がかって滑稽に見えるものである。ぼくは戦後この映画を見ていないが、そういう感じはおそらく一般的であろうとおもう。

ぼくの考えでは、古典的作品を、まずその製作年代に即して見るのが肝腎であるとおもう。つまり『巴里の屋根の下』でいえば、さっきもいったように、これが音声過剰の時代につくられた作品だということを、まず考えにいれる必要がある。そうすれば、この作品のオリジナリテはすぐハッキリする。すなわち、この映画は極度にせりふをすくなくしている。これは無声映画時代の美学であるイメエジの芸術性をできるだけ保存させたようにも見えるが、かならずしもそうではない。むしろこれは、イメエジと音声とのおのおのの独立性をみとめたうえで、これをあらためてモンタージュしようとしたものだからである。決してイメエジ専門の表現をしようとしたのではない。これを当時のことばでいえば、「イメエジと音声の非同時性」である。さらにくわだてていけば、口をあけてことばをだすからそのことばの音がきこえるというのではない、ということである。だから逆にいえば、口をあけてしゃべることに対応する音声は、それと同時にない「沈黙」かも知れないし、別の口から発せられることばかも知れないし、また一種の音響であるかも知れないのである。この「非同時性」という説をいだし、かつそれを実行したのがクレエルであることはた

しかだかこれに似た考えかたは、ソヴェトのエイゼンシュテインの「ショックとしてのみの音声」説にもある。だがエイゼンシュテインがこれをすぐさま実行したわけではない。

クレエルは、一方、フランスのシャンソン映画の創始者とみることもできる。アルベエル・プレジャンがうたうあの『巴里の屋根の下』のシャンソンによって、ぼくははじめてフランスのシャンソンをきいたといってもいい。それから以後、プレジャンやミルトンのうたうシャンソンを、つねに口ずさんだも[の]のである。しかし、このシャンソンのつかいかたも、むずかしいえば、例の「イメエジと音声の非同時性」からきているのである。そこではシャンソンと街の風景や人間の生活とが、実際の音声をぬきにして、モンタージュされていたからだ。

最後に、それは戦後この映画を見ていないぼくには確言できないが、ほかの古典的作品の例で類推して、むかしのぼくたちが見て感心した点とは別のことで、現在これに感服する点があるかも知れないということを書いておこう。これは現に、フランスの「ヌヴェル・ヴァアグ」の連中が、シネマテックで古典的作品を研究した結果、『恋人たち』や『いとこ同志』をつくっている点を見てもわかる。その意味では、『巴里の屋根の下』も、現在の青年諸君にあたらしい暗示をあたえるかとおもうが、発表当時のこの作品の意義と、現在発見される意義とは、一致する場合もあるし、一致しない場合もあるにちがいない。ぼくの考えでは、一致する場合にはなんのこともないが、もし一致しない場合は、当時の評価と現在の評価とを、一方的でなく、双方ともよく考えあわせることこそ、もっとも必要だろうとおもうのである。クレエルの作品でも、これにつく『ル・ミリオン』は完成された作品なので、あまりその点心配はないが、『巴里の屋根の下』は多分に音声過剰やだらしのない舞台的映画に対する反抗や修正の主張がこめられているだけに、この点は特に注意しておきたかった。

国立近代美術館 ファイルム・ライブラリー